

シンポジウム

生活を支える看護とは  
－年齢、障害の壁を取り払う－

Nursing to support daily life  
beyond the obstacles of aging and disabilities

惣万佳代子 Kayoko Souman (NPO 法人 このゆびと一まれ)

キーワード：看護、共生、富山型デイサービス

key words : Nursing, Symbiosis, Toyama-Model Day-Service

I. きっかけ

このゆびと一まれば平成5年7月に富山赤十字病院に勤めていた看護師3人が立ち上げた。対象は赤ちゃんからお年よりまで、障害があっても無くとも利用可能とした。

私は20年間病院に勤務し、最後の4年間は内科病棟であった。退院許可が出たおばあちゃんが「自分の家ながにどうして帰れんがけえ。畳の上で死にたいと言うとるがに」と、なげき悲しむおばあちゃんに何も応えることができなかった。

日中、おばあちゃんを預かれば、家で暮らすことができるし、お嫁さんは働くことができる。何か看護師として力になることができなかつたかと思ひ、病院を退職した。

II. 最初の利用者は障害児であった

明日から開所だというのに利用者の申し込みはゼロであった。それなのに富山県で初めての民営デイケアハウスが開所するというので、テレビ局や新聞社が取材にくるといふ。困惑していると、午後5時頃申し込みの電話が入った。意外にも重い障害をもった3才児であった。私達は最初の利用者は認知症のお年よりであろうと思ひ込んでいた。

「この子が生まれてから一度も美容院に行ったことがない。今日、パーマをかけてきます」との理由であった。

III. 誰もが地域でともに暮らす

日本の福祉施設はお年よりだけで100人・200人が住んでいる。知的障害者は500人が住んでいる。同じような人達だけでコロニーを作つてはいけなかつた、村を作つてはいけなかつた、22年間言い続けている。

その集団は異様であり、お互いの相乗効果が少ないからである。豊かな人間関係の中で人は育ち、喜びも大きい。一人ひとりが輝くのである。

IV. みんなが一つ屋根の下で過ごすことは  
日本の文化である

このゆびと一まれには22年経つた今も県外からたくさんの方の見学者が訪れる。「最先端な事をしたねえ」「画期的な事をしたねえ」と、よく言われるが、私達の



してきたことは最先端でも画期的なことでもなく、当たり前、ふつうの生活をしているだけである。赤ちゃんからお年よりまで、一つ屋根の下で過ごすことは日本の文化である。「共生」とはどんな人でも排除しないで包みこむことである。

## V. お年よりは赤ちゃんの顔を見ただけで笑顔がでる

認知症のお年よりが赤ちゃんをおんぶする。お年よりがおんぶひもをかけたのである。昔取った杵柄である。無抵抗な赤ちゃんを見ただけで笑顔がでる。誰も面憎いと思わないであろう。

認知症のお年よりに、一方的に介護されるだけでは気落していくであろう。お年よりがこれもできる、あれもできるとなれば、生き生きする。お年よりに人の役に立っていると意識をもつように働きかけることがケアの重要なポイントである。

マズローの「自己実現」は認知症のお年よりであっても、障害者であっても、人間が等しくもつニーズである。

## VI. 子どもが命の大切さと限界を学ぶ

今の日本に足りないものは、日常生活のなかで、子ども達にお年よりを看護する場面や死んでいく場面を見せない、体験させていない。だから、自分の生命も他人の生命も大事にしない子ども達が増えるのである。

死は怖いものではなく、人はいつか死がおとずれ、生命に限界があることを学ぶ。また、死は遠い出来事ではなく、身近にどこにでもいつでも起きるものだと感じている。

学校では学ぶことはできないが地域で学んでいる。

## VII. 独り暮らしの認知症のお年よりをどう支えるか

Aさんは10年前に夫が亡くなり、このゆびと一まれから200メートル離れた所に独り暮らしをしている。

近所の人「施設に入れて欲しい。困っている」と訴えてきた。その理由は朝と夕に食べきれないご馳走を玄関に並べるため、野良猫や野良犬がぞろぞろと集まってくるためだった。また、食べ終わると、畑や庭に入り込んできて、尿や便をしていくという。

Aさんに近所の人達の苦情を話しても、納得がいかない。自分は動物達が可哀相だから「何が悪い」と言いはっていた。

数年が経過し、近所の人達が変わってきた。富山は一晚で40~50cmの雪が降ることがある。このゆびと一まれの職員は朝の送迎時、道路からAさんの玄関まで



7メートル程を除雪し道を開けなければならない。

ある冬の朝、午前8時に職員が送迎にいくと、道がきれいに開いていた。近所の人々がしてくれたのである。数年前Aさんを施設に入れて欲しいと訴えてきた人達である。

数年前、近所の人達の訴えの通り、Aさんを施設に入所させていたら、近所の人達は変わらなかったであろう。俺達が反対してもAさんは家でねばって暮している。数年経っても施設に入らないじゃないか。それを少し、このゆびと一まれが支援している。そうか、このお婆ちゃんと一緒に生きていかなければならないのか。そうだとすると俺達に何かすることがないのか。除雪ぐらいならできる。やろうじゃないかとなっていたのです。

住みなれた地域でずーっと暮らすことはお年よりにとっても良いが、地域の人達を変えていくことにつながっていく。地域の人達が支え合っていかなければならないことに気づき、自分達もいつかAさんのように近所の人達に支えてもらわなければならないことに気づくのである。

Bさんは妻と2人暮らしであったが、介護していた妻が急死した。Bさんは今後も家で気ままに暮したいと願った。それに対し、町内会が反対した。2つの理由でBさんを施設に入れて欲しいと訴えてきた。それで地域包括支援センターの職員と町内会と私とで話し合いの場をもった。

理由の一つはBさんの死後発見が、例えば1週間や10日後になると、地方新聞に町内会の名前がでるので、町内会としたら恥である。2つめはBさんはいつもかも救急車を呼んでいた。奥さんがいた時は救急車の音を聞いても気にならなかったが、これからは特に夜中、救急車の音を聞いたら、おちおち眠れない。とのことであった。

Bさんのケアマネージャーをしているので、2つの課題を解決しなければならない。一つめの死後発見のことに关してはこのゆびで夕食を食べてから帰宅する

ことにした。送迎すると午後7時30分には家に着く。翌朝10時頃に迎えにいくと、その時、Bさんが死んでいても15時間後に発見ですから、新聞には載りません。第一発見者はうちの職員なので警察の聞きとりはありますが、こちらで対応するという話を話した。

2つめの特に夜間の救急車の要請の件に関しては、夜間カギをかけないことにした。カギをかけていると救急隊が駆けつけたとき、カギを壊してでも家に入ってくるという。Bさんは初めは納得しなかったが「何時でも救急隊は部屋まで入ってくれるから安心して眠られ」と言ったら頷いた

その後、何が変わったかと言えば、町内の人達が除草も除雪も積極的にしてもらえるようになった。

## VIII. 富山型デイサービスが特区から制度に

2006年10月1日、富山型デイサービスが制度になる。1つ屋根の下でお年よりも障害者（児）も一緒に過ごすことができるようになった。お年よりは介護保険で障害者（児）は総合支援法で利用できるようになった。

## IX. 富山型ショートステイが制度に

2004年11月1日、お年よりも障害者が利用できるショートステイに精神障害者（児）、知的障害者（児）も身近な所で利用できるようになった。

## X. 広がる共生型デイサービス

2013年3月現在、全国では1,427事業所、県内では94事業所に増えている。

## XI. 起業家育成講座をスタートさせる

年間、県外から2,000人以上の見学者があり、その人達に起業のノウハウを教えることができず、県に対し起業家育成講座を開催して欲しいと要望する。平成14年からスタートし、現在14年目になる。最近では県外より県外の受講生が多い。

## XII. 特別支援学校と連携協議会を発足させる

このゆびと一まれば平成5年から開所し、夏休みや長期休みには特別支援学校のプールや体育館を借り、使用していた。10年程経ち、校長先生が「使用禁止。悪しき慣習」だと言われた。そこで、校長先生と父兄と私とで話し合いをもった。「公共の施設を民間の一事業者に貸すわけにはいかない」と言われ、結局その夏のプールを借りることはできなかった。私は県教育長にFAXをした。「これからは学校開放に向っている。学校の建物は県民のものであり、まして、学校の生徒が利用するのになぜ利用できないのか」と訴えた。

その後、教育長が提案し、平成18年4月から特別支援学校と連携協議会を発足させ、現在も年6回会合をもち、続いている。

## おわりに

やりたい介護がとことんやれる。自分の判断で行うことができるから、介護は面白い。制度があつて活動するのではなく、町にニーズがあつて活動し、後から制度があつてきた。

赤十字の理念である「明日の100人を救うより、今日の1人を救え」という。今、目の前に困っている1人の人への全力投球をする事である。

誰もが、いつでも、いつまでも、安心して過ごせる町づくりを考えねばならない。在宅を支える地域包括ケアシステムにおいて看護師がこれからも重要な役割を果たしていくであろう。

